

クィア領域における調査研究にまつわる倫理や手続きを考える： フィールドワーク経験にもとづくガイドライン試案 溝口彰子、岩橋恒太、大江千東、杉浦郁子、若林苗子

はじめに：このガイドライン試案の背景

本ガイドライン試案は、クィア領域において調査研究を行う研究者、および、研究対象として聞き取り取材を受ける、あるいは、資料提供をする協力者たちが知っておくべき倫理や手続きについてまとめたものである。なぜこのようなガイドライン試案が必要なのか。それは、クィア領域での調査研究は、セクシュアル・マイノリティを研究対象とする学際的なものである場合が多く、既存のさまざまな学会が公表しているガイドラインや社会調査の教科書などではカバーしていないリスクがあるためだ。¹

本ガイドライン試案は、クィア領域における調査研究が引き起こした、あるいは引き起こしうる問題について何とかしたいと考える5名によって共同執筆された。したがって、それぞれのLGBT（レズビアン/ゲイ/バイセクシュアル/トランスジェンダー）コミュニティにおける市民活動やフィールドワーク、研究、教育活動にも影響されている。² つまり、ここで強調しなくてはならないのは、本試案は、そのような文脈から生まれたローカルなものであるということである。

以下、4つのカテゴリーに分けてガイドライン試案を綴っていく。複数のカテゴリーで内容が重複する部分もあること、ガイドラインという性格上、「ですます」調を採用していること、また、本試案が質的調査についてのみのものであり、量的調査については今後の課題であることも申し添える。

1 調査研究や取材において配慮したいこと

調査研究や取材は、その目的にどんな社会的な意味があるのかを十分に検討したうえで、実行に移されます。また、調査や取材では、その全プロセスにおいて、基本的な手続きや倫理に則ることが求められており、それが個人の人権を侵害したり、組織・団体の名誉を毀損したりしていないか、十分な配慮がなされます。

しかし、クィア領域でなされる調査研究や取材では、研究・取材をする側が当事者性を有していることが要因となって、基本的な配慮がおろそかになることが懸念されます。

研究者や取材者自身が「当事者」である場合、自分にとってはクィアに関するテーマを選ぶ意味が自明であるため、調査研究や取材の社会的意義を十分に深める前に現地や現場へ出てしまうことがあります。また、調査や取材の協力を依頼するさいに、無意識に「仲間」意識を利用してしまうことがあります。以下では、研究者や取材者が「当事者」としてテーマに関わることの多いクィア領域において、どんな問題が生じやすいか、現地や現場でどんな配慮が求められるか、などについて述べていきます。

(1) 調査研究・取材の目的を十分に検討すること

調査研究や取材の社会的意義を深めてから、現地・現場へ出かけてください。調査や取材の目的が、どの社会に生きるどんな人々にとってどのような意味があるのかを、十分に吟味しましょう。調査や取材は、対象者に負担をかけるものです。にもかかわらず、対象者が協力を申し出るのは、負担に見合う社会的意義を見出すからです。「なぜこのテーマを追究するのか」という質問に「当事者だから」としか答えられないうちは、調査・取材の社会的な意義を十分に検討したとは言えないでしょう。

(2) 性指向・性自認の開示と「仲間」意識の利用

i) 調査者・取材者が注意すべきこと

調査者・取材者が、対象者から性指向や性自認の開示を求められることがあります。自分に関する情報を誰にどこまで開示するのは、各自で判断すべき事柄です。ただし、セクシュアル・マイノリティ当事者であることを開示するさいには、自分が当事者であることを利用して対象者の信用を得ようとしていないかについて気を配って下さい。調査・取材への信頼や安心は、本来、その意義や考えられる不利益を十分に説明することを通して獲得すべきものです。調査者・取材者が当事者である場合、協力者は「仲間」として気を許し、非当事者の調査者・取材者よりも心を開いて話をしたり、より多くの資料提供をし

たりする傾向があります。調査者・取材者は、こういった「仲間」意識を自分が不当に利用していないか、最大限の注意を払わなければなりません。

ii) 協力者が注意したいこと

調査・取材への協力を依頼されたとき、研究者・取材者が当事者だと知っても、調査や取材の目的・内容・方法・公表の仕方などについて、きちんと説明を受けましょう。調査や取材への協力は、「仲間」を個人的に応援する気持ちとは切り離して、その目的やプロセス、社会的意義に対する理解や共感にもとづいて判断しましょう。

(3) 調査・取材協力のデメリット—— 予期せぬ心身のダメージ

セクシュアル・マイノリティ当事者を対象にした調査や取材では、協力者の心身により気を遣いましょう。長期にわたる社会的排除の体験により、協力者が心身の不調を抱えていたり、複合型PTSDの症状をもっていたりするおそれがあります。

調査・取材をする者は、調査・取材が心身に予期せぬダメージを与える可能性があること、症状が悪化しても個人的なサポートは難しいことなどを、事前に協力者に説明することが重要です。

調査・取材に協力する側も、心身にダメージを受ける可能性について、知っておいてください。

(4) 「調査・取材」と「支援」の峻別

i) 「調査・取材」は「支援」ではない、という自覚

協力者が自分の経験を語る過程で解放感や癒しの感覚を得ることもありえます。このような、調査や取材による副産物的なメリットを否定する必要はありませんが、調査・取材の目的は、相談を受けたり支援をしたりすることではない、ということ常を常に自覚しておきましょう。

ii) 協力者との距離のとり方

生活上の問題や心身の不調を抱えている協力者をサポートしたい場合、調査者・取材者はまず、支援に関する専門的なノウハウのある団体につながると良いでしょう。調査者・取材者自身が支援スキルをもっている場合でも、協力者に

対する個別の支援には慎重な態度が求められます。それが調査・取材の客観性を損ねる可能性もありますし、支援が長期にわたり個人の手に負えなくなる可能性もあるからです。

(5) 自助グループや支援団体に参加するさいの注意点

i) 事前に説明をして同意を得られない場合

セクシュアル・マイノリティの自助グループや支援団体の一員として行ったこと、経験したことを、事後的に発表したくなることもあり得ます。その場合、事前に調査・取材の説明をし同意を得る、というプロセスを踏むことはできませんが、発表の意志が固まった時点で、グループや団体の他メンバー全員に対して、活動の記録をつけていたことや、記録を使って執筆をしたいことなどを伝え、了解を得ましょう。了解を得ずに公表することは、あってはならないことです。

ii) 日本語の「クィア」という言葉の包括性もたらす問題

「クィア」を冠したセクシュアル・マイノリティの集まりに、研究者・取材者が「異性愛も性の多様性(クィア)の一部だから」と「当事者」として参加することで、マイノリティ参加者が抑圧される、といった問題が報告されています(るばん4性, 2008)。

英語圏では、「クィア」のもとの意味は「変態」「オカマ」「ホモ野郎」など差別的な言葉であることが知られていますが、日本では「多様な変態」といった、スティグマの少ない意味で理解されているために、こうしたことが起こるようです。

「当事者」とは、自分に深く関わりのある問題に取り組もうとする人々が相応の覚悟とともに引き受ける立ち位置です。研究者・取材者が軽々しく「当事者」を名乗る行為は慎みましょう。「クィア」という言葉を通じて共感できる部分があったとしても、「単なる調査者・取材者」として「当事者」の前に現れる真摯さが求められます。

(6) トラブル解決のためのNGOの利用

調査や取材の過程でトラブルが生じたとき、セクシュアル・マイノリティの

ための市民団体に相談することもできます。トラブル当事者同士の話し合いで問題を解決することは難しいものです。仲介に入る第三者としてそうした団体を利用することも、ひとつの方法です。

2 大学において配慮したいこと

(1) 研究を指導する教員が配慮したいこと

i) 学生・院生のアイデンティティの詮索

学生・院生がセクシュアル・マイノリティに関する調査研究を行う場合、指導にあたる教員は、その学生・院生がセクシュアル・マイノリティ当事者であるかどうかを問題にしてはいけません。このテーマを選んだ学生・院生を「当事者である」と決めつけることも、反対に「当事者でない」と決めつけることも控えましょう。

学生・院生によっては、指導教員からの研究動機に関する質問を、個人の抱える事情を聞かれていると受け取ることもあり得ますので、配慮が必要です。

ii) 調査指導の徹底

学生・院生がセクシュアル・マイノリティ当事者であるからといって、協力者のプライバシー保護を徹底できるとはかぎりません。当事者であることが協力者の信用獲得につながる傾向があるため、学生・院生が調査に関するインフォームドコンセントをおろそかにすることも考えられます。調査の基本的な手続きや倫理に関する指導には、より一層気を配ってください。

学生・院生が当事者であるからといって、良い研究ができるともかぎりません。LGBTコミュニティで精力的な活動をし、豊富な人脈をもっていたとしても、学生・院生の場合、研究者としての経験に乏しく、アカデミック・ライティングのスキルも不十分です。フィールドワークや調査研究を学生・院生に任せきりにすることなく、定期的に進捗を確認し、指導をしてください。

(2) 学生・院生が注意したいこと

i) カミングアウトする/しない自由

指導教員や他の学生に研究動機を聞かれたとき、性指向や性自認を告白する必要はありません。教員が知りたいのは、主に、その研究テーマに取り組むこ

とにどんな社会的・学問的な意義を見出しているのかということであって、学生・院生の個人的な事情ではないからです。

個人的な事情から研究テーマを選ぶことはあって良いですし、それが研究への妥協しない姿勢につながることも良いことです。しかし、だからといって、個人的な動機を指導教員に話したり、論文に書かなければならないわけではありません。また、自分が当事者であることが、研究の質や社会的・学問的意義を自動的に保証するわけでないことも知っておいてください。

ii) 指導を受ける権利

指導教員より自分のほうがLGBTコミュニティに熟知していたとしても、学生・院生には、論文の構想や執筆、調査の過程において、教員から指導を受ける権利があります。とりわけ卒業論文や修士論文、博士論文は、教員との対話を通して思考を進め、ともに練り上げていく作品という側面があります。指導教員がLGBTやマイノリティについてくわしくない場合でも、積極的に助言を求めましょう。

(3) 調査依頼をされた学生・院生が知っておきたいこと

i) 調査に関する説明をうける権利、拒否する自由

カミングアウトした友人から調査協力の依頼があったときは、調査研究の目的、調査から得られた情報の利用の仕方や公開の範囲、個人情報の保護の仕方などをきちんと確認しましょう。調査に協力する意義が理解できない場合、個人情報の管理に不安がある場合などは、調査を断ってかまいません。

ii) トラブルの相談先の確保

学生・院生から調査を依頼されたときは、指導教員の連絡先を聞いておくとういでしょう。調査協力の過程で、あるいは調査協力を断る過程で、何か問題が生じたときには、指導教員に問い合わせ、トラブルについて相談することができます。

iii) 中断する自由

調査協力には、ライフストーリーを話したり、過去のつらい体験を話したりすることを求められるものもあります。話している最中に具合が悪くなった場合は、調査の中断を求めましょう。話を終わらせることができなくても、気に

することはありません。

3 テキスト分析において配慮したいこと

(1) テキスト分析とプライバシー詮索の違い

i) 作品の読みと作り手のアイデンティティの峻別

美術、文学、映画などの作品に同性愛的要素があるとして読む、いわゆる「ゲイ・リーディング」「レズビアン・リーディング」を行うことは、読む側の自由です。ただし、その読みの行為と、作品の作り手が「ゲイやレズビアンに違いない」といった憶測をすることは、全く別のことであることに注意しましょう。

ii) 公的なカミングアウトとは

ゲイやレズビアン、トランスジェンダーとしてカミングアウトをしている作家が、「ゲイ的」「レズビアン的」「トランスジェンダー的」な作品を創作しているケースももちろんあります。この場合のカミングアウトとは、作家本人が公的な媒体ではっきりと自らの性指向や性自認を公言していることを指します。

たとえば、作家がプライベートな場所で同性の恋人を連れていたことをその場にあわせた人がインターネット上で暴露していたとしても、その暴露情報のURLと最終アクセス日を記載したからといって、公的なカミングアウトの証拠とはなりません。「有名人のAとどこどこで会った」といった噂話も、公的なカミングアウト情報とはなりません。商業雑誌などの公的な媒体にゴシップ記事やスクープ写真が掲載されている場合、そういった記事や写真が出ていた、ということに言及することはできますが、その記事や写真をもってして、「Aはゲイ/レズビアン/トランスジェンダーである」と断定することはできません。

iii) 翻訳における注意点

翻訳においても、原文でははっきりと「ゲイ」「レズビアン」「トランスジェンダー」などと書かれていない文について、翻訳者が勝手に書き加えてはいけません。³

(2) 読みの根拠を示す必要性

いわゆる「ゲイ・リーディング」「レズビアン・リーディング」を行うことは、読む側の自由・調査する側の自由だと上述しましたが、なぜ「ゲイ」もしくは「レズビアン」と読めるのかについては、その理由を説明しましょう。「クィア・リーディング」については、「クィア」がかなり広い意味で用いられている言葉であるため、自論のなかで定義を述べましょう。

4 調査・研究成果の公表において配慮したいこと

(1) 研究者・取材者が配慮したいこと

研究者・取材者がセクシュアル・マイノリティの個人・団体に取材・インタビューをして書いた原稿・記事・論文等を公表するときには、必ず事前にその個人・団体に連絡・確認をしましょう。そして、その原稿・記事・論文等が発行された場合には、発行物をその個人・団体に送りましょう。

(2) ミニコミと一般書籍との違い

一般の書店販売ではなく、読者を主に会員に限定して発行されているセクシュアル・マイノリティ団体のミニコミ誌等の記事を引用あるいは転載する場合には、その団体に事前に連絡と確認をとりましょう。

とくに、インターネットが普及する以前に発行されたミニコミ誌は、顔の見える範囲の仲間のみが目にする媒体であるという認識のもとに、広く社会全体に対してはカミングアウトをしていない書き手が、実名や、個人を特定できる情報を出して執筆しているケースもあるため、十分な注意が必要です。印刷物という体裁においては同様であっても、一般に流通している書籍とミニコミ誌は全く性格の異なる媒体であることを理解しましょう。

自分ではうまく見分けがつかない場合、ミニコミの発行団体が存続しておらず、直接の確認がとれない場合などは、教員に現物を見せて相談しましょう。「数十人の仲間のみに向けて書かれた言葉」を不特定多数にさらすことのないように、最大限の想像力をもって配慮しましょう。

(3) 匿名性への配慮

調査や取材、個人的な雑談などを通して知り得た、たとえば「A」についての情報は、Aに許可なく公開してはいけません。ブログやtwitterやfacebookなどのSNS、私信において知った情報についても注意が必要です。セクシュアル・マイノリティは、自分についての情報をどこまで、誰にまで公開しているのか、個々人で細かく異なる場合が多く、調査者・取材者にとっては誰に知られても問題ないと思われるようなことでも、本人は隠しているケースがあります。調査者・取材者の認識によって判断することは避け、公表にあたっては「A」本人の意志を確認することを徹底しましょう。

(4) 協力者が知っておきたいこと

社会的に孤立して生きているセクシュアル・マイノリティは、セクシュアル・マイノリティの研究者・取材者に対して連帯感や安心感を持ちやすいものです。それは、マイノリティ同士として、その悩みや苦しさを共感し、興味本位ではない記事・論文を書いてくれるだろうという期待を持つからです。しかし、現実には、研究・取材を「される側」と、「する側」の立場は、根本的に異なります。その違いを認識し、適切な距離を持って対応することが必要です。

具体的には、研究者・取材者が「仲間」であっても、自分の発言が引用されている原稿を発表以前にチェックすることを要求するべきです。また、貴重な資料の貸し出しにあたっては、万一、返却されない場合を考えて、慎重に行動しましょう。

セクシュアル・マイノリティ当事者として親近感を抱き、通常以上に協力してあげたいと思う気持ちは自然なことです。しかし、最悪のケースをも想定して、注意深く接することは、連帯感と矛盾するわけではありません。むしろ、結果的にはその研究や取材を良好な関係のままに終わらせることにつながり、研究者・取材者の仕事を助けることになります。自分（たち）と研究者・取材者の年齢差や一般的な社会的地位の差などにかかわらず、常識的な礼節を保って協力してください。

また、どうしても良い協力関係が築けそうもない場合は、協力を断ったり途

中で辞退したりする決断も必要です。時には、研究者・取材者側の締切の都合などで、原稿チェックを、最初に示されていたよりも短時間でしてほしい、と頼まれることなどもあるかもしれません。もちろん、自分（たち）に無理のない範囲で協力することは問題ありませんが、無理がある場合はその旨を伝えましょう。「いったん取材を受けたのだから、後は相手の言いなりにならなくてはいけない」と考える必要はありません。

おわりに

以上は、クィア領域の調査・研究にまつわる倫理や手続きについてのみ記したものである。一般的な研究ガイドラインについては、各学会、各大学などが公表している指針や綱領を参照されたい。

Footnotes

¹ 本稿での「クィア」の用い方について、最低限の説明を加える。

まず、「クィア queer」とは英語で、強く侮蔑的なニュアンスをこめて男性同性愛者を指す言葉である。また、その言葉をあえて採用し、現在にたつらなるクィア理論としての用法を初めて示したのは、フェミニスト映画研究家であるテレサ・デ・ラウレティスによる1991年の論文「クィア理論：レズビアン・アンド・ゲイ・セクシュアリティーズ 序章」だ。その論文のなかでも、「ゲイ/レズビアンをつなぎ、隔てる棒：理論的接点？」と「ゲイとレズビアン向けのバー：理論を商う飲食店」という2つの意味をかけた小見出し（原文：The Gay/Lesbian Bar: A Theoretical Joint?）をつけたセクションで、デ・ラウレティスは、ゲイとレズビアンを「アンド」でつなげたフレーズでは、レズビアンとゲイの間の差異は暗示こそされるものの、単に当然のものとして扱われるか、覆い隠されていると批判する。小見出しには、飲食店経営者はレズビアンとゲイのニーズが異なることを理解し、「レズビアン・アンド・ゲイ・バー」「ゲイ・アンド・レズビアン・バー」と名乗るバーがないのに、運動家や理論家は両者を安易に並置している、という皮肉がこめられているのだろう。その上で、今度は、人種の差異に鈍感な白人レズビアンを批判するオードリー・ロードの小説の一節も引用している。つまり、男女の差異や人種の差異に無自覚な人々の目を覚まさせる荒療治として、「クィア」を採用し、「クィア理論」を提唱したのだと解釈できる（De Lauretis, 1991）。

英語圏でも、デ・ラウレティス論文から20数年が経過し、論者によって「クィア queer」は幅広い意味で用いられているが、近年、クィア理論家で美術評論家のダグラス・クリンプが、「クィアネスが新しい関係性を意味するならば、同性婚を要求するような保守的政治運動への傾斜は性的解放とクィア理論への反動として起こったことは明らか」と述べているように、「LGBT（セクシュアル・マイノリティ）」が異性愛者と同じ権利を求めるのではなく、既存の異性愛規範社会では存在しえなかった何らかの関係性を指し示す言葉として用いられることが多いようだ（Crimp, 2012）。

一方、日本語圏では、ゲイ評論家伏見憲明が「日本語に訳せば『おかま』とか『変態』となるが、「欧米では、積極的にノン・ストレートな生き方を選びとる人々のアイデンティティを現す言葉となっている」「この本は、そういう『クィア』たちが固有の問題（ゲイならゲイの、レズビアンならレズビアン）の状況と戦略の違い）を自覚しながら、他の『クィア』たちと可能なかぎりつながっていくという意志のもとに

作られたものです」と1996年に述べた宣言に見て取れるように、もともと男性同性愛者を指す侮蔑的言葉であることはあまり関係なく、異性愛規範から外れる「変態」は、共通の「クィア」というアイデンティティを選びうるという、包括的な用語として用いられる傾向がある（伏見, 1996: 7）。

ただし、「ノン・ストレートな生き方」という概念として「クィア」を使用するさいには、クリンプが言うところの、「新しい関係性」につらなる意味も見てとれる。

このように、「クィア」が意味するところは幅広いのだが、本稿はこの概念を、日本語圏で流通している意味において用いている。それは、本試案が「LGBTIQ (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Intersex, Questioning/Queer)」や「セクシュアル・マイノリティ」にとどまらず「多様な性」「非典型とされる性」を取り上げるすべての調査研究を念頭に置いていることに加え、日本語圏における包括的な語法それ自体がもたらす問題も視野に納めているからである（たとえば「1- (5) -ii 日本語の「クィア」という言葉の包括性がもたらす問題」）。

なお、上述のデ・ラウレティス論文のこれまで出版された和訳文は、誤解をまねく箇所が多いため本稿ではあげていない。

- ² 研究活動のうち、複数の共同執筆者がかかわった活動として、『クィア学会 研究倫理ガイドライン（仮称）』検討ワークショップ・シリーズ（2008年11月から2011年11月まで）および『参考資料：クィア領域における調査、研究にまつわる倫理や手続きについて』を作成するワーキング・グループ（2011年11月から2012年11月まで）の活動がある。日本クィア学会での一連の活動の発端や詳細については別稿を参照されたい（溝口, 2010 & 杉浦, 2014）。
- ³ 悪しき実例として、以下をあげる。原文の「ジョーンズによる抽象表現主義のキャンパブ的な批判が最もあからさまなのは…」(Katz, 1993:205) という文章が邦訳版では「ジョーンズはゲイとしての立場から抽象表現主義を揶揄していたのだが、そんな態度が最も鮮明になったのは…」(カツツ, 1996:167) と訳されていた。

References

- Crimp, Douglas. (2012). Douglas Crimp, as told to Chelsea Weathers (500 Words) ,
Artforum. 04.02.12
(<http://artforum.com/words/id=30677>) (最終アクセス2013 12/23)
- Katz, Jonathan. (1996). 「記号の芸術：ジャスパー・ジョーンズとロバート・ラウシェンバーク」. In 『カップルをめぐる13の物語 創造性とパートナーシップ下』.
(野中邦子&桃井緑美子, Trans.). 東京：平凡社, 137–172. = (Original work
published 1993). *The Art of Code: Jasper Johns and Robert Rauschenberg*.
In W. Chadwick. & Isabelle de Courtivron. (Eds.). *Significant Others: Creativity
and Intimate Partnership*. London: Thames and Hudson, 189–208.
- De Lauretis, T. (1991). *Queer Theory: Lesbian and Gay Sexualities: An Introduction*,
Differences, 3 (2), iii–xviii.
- 伏見憲明. (1996). 『クィア・パラダイス「性」の迷宮へようこそ』. 東京：翔泳社
- 溝口彰子. (2010). 「クィア学会 研究倫理ガイドライン (仮称)」検討ワークショップ・
シリーズ活動報告 (初年度& 2009年度初回). 『論叢クィア』. 3, 110–112.
- るぱん4性. (2008). 「ノンケのセクシュアリティ研究者についての研究：その行動と思
考の分析」. ROS. (Ed.). 『恋愛のフツがわかりません!!』. 大阪：アットワー
クス, 148–156.
- れ組スタジオ・東京. (2008). 『れ組通信』. No. 250.
- 杉浦郁子. (2014). 『『ピア』に対するローカルな研究倫理という課題：クィア学会会員
有志による活動を通じて考えたこと』. 『社会学研究』. 93, 79–92.

Ethics and Procedures for Researchers and Research Subjects in the Realm of Queer Studies: Tentative Guideline Informed by Fieldwork
Akiko MIZOGUCHI, Kohta IWAHASHI, Chizuka OE,
Ikuko SUGIURA, Naeko WAKABAYASHI

This paper lists ethical and procedural points that the co-authors believe are crucial for both researchers and research subjects in the realm of queer studies. While the definition of the term “queer (kuia)” in Japanese tends to be broader and more ambiguous than in English because there is no strict equivalent to “queer” in Japanese language, in this paper the authors start with the premise that Japanese-language research projects in the queer realm tend to be interdisciplinary and tend to involve people who identify themselves as sexual minorities, commonly called “LGBT (lesbian, gay, bisexual, and transgender).” As such, research endeavors in the queer realm have different kinds of difficulties and risks from those in other realms. Though each researcher usually belongs to another, more traditional discipline such as sociology, art history, and literary studies, among others, in addition to queer studies, the existing guidelines and textbooks in such traditional disciplines do not address the risks and problems particular to research in the queer realm.

As the first attempt in the Japanese language to “spell out” such queer-related risks, issues, and also possible ways to alleviate them, this tentative guideline nevertheless does not profess to be comprehensive or universal. Yet the authors believe that it is imperative for Japanese-language “queer” researchers to start to acknowledge specific risks and issues. In order to help the researchers (including graduate and undergraduate students), instructors (including the ones that are not at all aware of LGBT issues), research subjects or collaborators (who give interviews and provide informational materials such as the back issues of self-published zines), this paper is organized in four categories. They are: 1) “what needs to be

considered in the field of queer inquiry by both the researchers and research subjects," 2) "what both the instructors and students of queer subject matter need to be careful about in the academic context," 3) "important points about textual analysis of queer material," and 4) "necessary procedures at the time of publishing and presenting the results of queer research topics." This paper discusses the complex dynamics between researchers and research subjects especially in cases in which the researchers themselves are members of sexual minorities. In such cases, the researchers might encourage research subjects of the same minority group to participate in their research without obtaining enough information about the skill, scope and aim of the researcher and the research project. This paper also examines the differences between queer readings and outing the artists and authors of the texts and representations, among many other issues.

Keywords:

Japanese-language queer research, research ethics, LGBT, outing, over rapport